

水球における 2006 年度改正されたルールに対応する為のゲーム分析
Game analysis to correspond to rule revised in fiscal year 2006 in water polo
1K03A198-4 曲山 洋司

指導教員 主査 奥野 景介 先生 副査 寒川 恒夫 先生

【目的】

2006 年度から水球のルールが変更になるため、ルール変更前の試合を使いゲーム分析をして、その結果をどのように使って、これからの試合に役立てていけば良いのかを考えれば、できるだけ早く新しいルールにも対応でき、何が足りないのか見つけ出し、どのような練習を組めばよいのかかわかれば、他のチームに差をつけられるのではないかと思いますこの実験を行うことにした。また、日本のトップの水球チームを採り上げることににより、日本の水球チームの傾向はどうなっているのかわかり、日本の水球に貢献出来るのではないかと考えた。

【方法】

1. 対象ゲーム

日本の大学水球で、2005 年度では上位に入ってくるチームは 4 チームと固定されていたため、その 4 チームを採り上げることにした。その中で某大学を A チームとし、他の 3 チームをそれぞれ B チーム、C チームおよび D チームとし、A 対 B、A 対 C および A 対 D の試合をそれぞれ 1 試合ずつ一番重要と思われる試合を取り上げて、計 3 試合のゲーム分析する事にした。

2. 撮影条件

試合会場の観客席より、VTR カメラを用い、フリーハンド撮影を行った。

3. 分析項目

日本水泳連盟水球委員会にて実施されている分類法に独自の分類法（シュート位置、シュート種類、シュート距離およびシュートを打った時の状況）をプラスした。この項目について後日ビデオ映像より分析を行った。

【結果と考察】

他のチームに差をつけ比べるために、A チームを中心にゲーム分析を行った。

オフェンス面は、負け試合でカウンターアタックなどのノーマークによるシュートがほとんど入らずチャンスを活かしきれなかった。また、水球で重要な退水誘発が少なかった。これらにより課題は、カウンターアタックなどのノーマークによるシュートの決定力をあげ、もっとノーマークを活かすオフェンスをしなくてはならない。また、退水誘発が少ないため、もっと積極的なオフェンスをし、退水誘発を増やしていく必要がある。

つぎにディフェンス面は、独自の分析項目により、深く

知ることができる。A チームは、退水誘発に比べ退水損失が多く、1 対 1 が弱いため失点されている。さがりのディフェンスについてはシュート本数が少なかった。これらにより課題は、1 対 1 のディフェンスを強化し、得意であるさがりによるディフェンスも利用して 1 対 1 での失点を減らし、退水損失も減らしていくべきだと考えられる。

新ルールに関しては、7m シュートによるシュートや得点よりも、5m や 6m からのシュートや得点は非常に多くなっているため、これから狙っていくことが増えるというのは間違いないと思われる。対策としては、ハンドアップをして守ることが重要になってくる。課題は、いかにキーパーと連携をとり、またオフェンスはそのハンドアップを横などにかかわしてシュートを打ってくるので、一瞬で横に移動してシュートに反応しなければならない。

オフェンスの面では、カウンターの練習や、ゲーム形式の練習を多く採り入れ経験で上達していく必要がある。また、1 対 1 の練習を多く採り入れ、退水を誘発する状況を作っていかななくてはならない。また、5 m シュートの決定率をあげるために、様々なシュート練習を採り入れていく必要がある。

ディフェンスの面では、1 対 1 のディフェンスを強化するために、アニマルというゴール前で潰し合いの練習をしたり、足の強化のために重りを持って巻足やけり足をしたり、力で負けないためにウェイトトレーニングを強化していく必要がある。得意であるさがりによるディフェンスも強化し、メディシンボールを使って横に移動したり、重りをつけてハンドアップの練習をしたりする必要も生じる。

【まとめ】

本研究の結果、オフェンスでは、今後さらに重要になってくるシュートを中心に深く知ることができた。ディフェンスについてはシュートから判断し、以前から使われているゲーム分析より深く知ることができた。今後の課題や練習方法などシュートを詳しく取り上げたことにより、私自身の意見も踏まえて把握することができた。また、日本の水球チームの傾向については、体が小さい日本人にとってカウンターによる攻撃が有効で、重要になってくるのはたしかだ。今回の研究で、ゲーム分析をどのように活用するかで、分析項目の変更および、増加することによって、詳細な分析を試みて、有効活用することが、各チームおよび、各スポーツのレベルアップにつながっていくと思われた。